Babylonian Exile

バビロニアン　エクザイル

知っておきたいキリスト教のことば　（165）

バビロン捕囚　ばびろんほしゅう

聖書には、「バビロン捕囚」という出来事が載せられています。これは「出エジプト」同様、イスラエル民族が苦難の中にあったことを伝えるものです。

バビロン捕囚の記事は主に列王記下に出てきます。紀元前 597 年にイスラエル民族が新バビロニア王朝のネブカドネツァル王によって撃たれ、主だった人たちが主都バビロンに連れて行かれたことが捕囚の始まりです。

さらに前 586 年にはエルサレムも陥落し、住民の大部分が捕虜となって連行されます。

この捕囚は前 538 年まで続きます。そしてこの年ペルシアの王に即位したキュロスは布告を発し、イスラエルの人々を解放し、エルサレム神殿を再建することを許しました。その状況は、エズラ記やネヘミヤ記に書かれています。

なおこの「バビロン捕囚」ですが、聖書では「罪の代償」として描かれています。列王記にはイスラエルやユダの王が列記されていますが、それぞれの王について「彼は父が行ったように、主の目に悪とされることをことごとく行った」といった記述がみられます。（何人か、正しいことを行った人もいますが）

預言者たちによってその罪は指摘され、悔い改めを促されたのですが、王たちのおこないは変わりませんでした。そこで、「エルサレムとユダは主の怒りによってこのような事態になり、ついにその御前から捨て去られることになった。（列王記 24 章 20 節）」となったわけです。

「因果応報」という考え方を、特に旧約聖書は伝えているのです。

次回は「バプテスマ」です。お楽しみに。

「バビロンの川のほとりで」
エドゥアルド・ベンデマン
（1811-1889 年）

彼らはゼデキヤの目の前で彼の王子たちを殺し、その上でバビロンの王は彼の両眼をつぶし、青銅の足枷をはめ、彼をバビロンに連れて行った。

（列王記下 25 章 7 節）